

交尾

梶井基次郎

青空文庫

その一

星空を見上げると、音もしないで何匹も蝙蝠こうもりが飛んでいる。その姿は見えないが、瞬間瞬間光を消す星の工合から、気味の悪い畜類の飛んでいるのが感じられるのである。

人びとは寐静ねまつている。——私の立っているのは、半ば朽ちかけた、家の物干し場だ。ここからは家の裏横手の露路を見通すことが出来る。近所は、港に舫もやつた無数の廻船かいせんのように、ただぎつしりと建て詰こんだ家の、同じように朽ちかけた物干しばかりである。私はかつて独逸ドイツのペツヒシュタインという画家の「市に嘆けるクリスト」という画の刷り物を見たことがあるが、それは巨大な工場地帯の裏地のようなところで跪ひざまずいて祈っているクリストの絵像であつた。その連想から、私は自分の今出ている物干しがなんとなくそうしたゲツセマネのような気がしなくてもない。しかし私はクリストではない。夜中になつて来ると病氣の私の身体からだは火照ほてり出し、そして眼めが冴さえる。ただ妄想もうそうという怪獣かいじんの餌食えじきとなりたくないためばかりに、私はここへ逃げ出して来て、少々身体には毒な夜露に打たれるのである。

どの家も寐静まっている。時どき力のない咳せきの音が洩もれて来る。昼間の知識から、私はそれが露路に住む魚屋の咳であることを聞きわかる。この男はもう商売つちも辛いらしい。二階に間借りをしている男が、一度医者に見てもらえというのにどうしても聴きかない。この咳はそんな咳じゃないと云つて隠そうとする。二階の男がそれを近所へ触れて歩く。――家賃を払う家が少なくて、医者いしやの払いが皆目集まらないというこの町では、肺病は陰忍な戦いである。突然に葬儀自動車が来る。誰もが死んだという当人のいつものように働いていた姿をまだ新しい記情のなかに呼び起す。床についていた間というのは、だからいくらもないのである。実際こんな生活では誰でもがみずから絶望し、みずから死ななければならぬのだらう。

魚屋が咳せいている。可哀かわいそうだなあとと思う。ついでに、私の咳がやはりこんな風に聞こえるのだらうかと、私の分として聴いて見る。

先ほどから露路の上には盛んに白いものが往来している。これはこの露路だけとは云わない。表通りも夜更よふけになるとこの通りである。これは猫だ。私はなぜこの町では猫がこんなに我物顔に道を歩くのか考えて見たことがある。それによると第一この町には犬がほとんどいないのである。犬を飼うのはもう少し余裕のある住宅である。その代り通りの家

では商品を鼠^{ねずみ}にやられないために大低猫を飼っている。犬がいなくて猫が多いのだから自然往来は猫が歩く。しかし、なんといつても、これは図々しい不思議な気のする深夜の風景にはちがいない。彼らはブルヴァールを歩く貴婦人のように悠々^{ゆうゆう}と歩く。また市役所の測量工夫のように辻^{つじ}から辻へ走ってゆくのである。

隣の物干しの暗い隅^{すみ}でガサガサという音が聞こえる。セキセイだ。小鳥が流行^{はや}った時分にはこの町では怪我^{けが}人^{にん}まで出した。「一体誰がはじめにそんなものを欲しいと云い出したんだ」と人びとが思う時分には、尾羽打ち枯らしたいろいろな鳥^{すずめ}が雀^{えさ}に混^まって餌^{えさ}を漁^{あさ}りに来た。もうそれも来なくなつた。そして隣の物干しの隅には煤^{すす}で黒くなつた数匹のセキセイが生き残っているのである。昼間は誰もそれに注意を払おうともしない。ただ夜中になつて変てこな物音をたてる生物になつてしまつたのである。

この時私は不意に驚ろいた。先ほどから露路をあちらへ行つたりこりこちらへ来たり、二匹の白猫が盛んに追つかかけあいをしていたのであるが、この時ちようど私の眼の下で、不意に彼らは小さな唸^{うな}り声をあげて組打ちをはじめたのである。組打ちと云つてもそれは立つて組打ちをしているのではない。寝^ね転^{ころ}んで組打ちをしているのである。私は猫の交尾を見たことがあるがそれはこんなものではない。また仔猫^{こねこ}同志がよくこんなにしてふざけ

ているがそれでもないようである。なにかよくはわからないが、とにかくこれは非常に艶^{なま}めかしい所作であることは事実である。私はじつとそれを眺^{なが}めていた。遠くの方から夜警のつく棒の音がして来る。その音のほかには町からは何の物音もしない。静かだ。そして私の眼の下では彼らがやはりだんまりで、しかも実に余念なく組打ちをしている。

彼らは抱き合っている。柔らかく噛^かみ合っている。前肢でお互いに突張り合いをしている。見ているうちに私はだんだん彼らの所作に惹^ひき入れられていた。私は今彼らが噛み合っている気味の悪い噛み方や、今彼らが突つ張っている前肢の——それで人の胸を突つ張るときに可愛^{かわい}い力やを思い出した。どこまでも指を滑^{すべ}り込ませる温^{あた}かい腹の柔毛^{にこげ}——今一方の奴^{やつ}はそれを揃^{そろ}えた後肢で踏んづけているのである。こんなに可愛い、不思議な、艶めかしい猫の有様を私はまだ見たことがなかった。しばらくすると彼らはお互いにきつく抱き合ったまま少しも動かなくなってしまった。それを見ていると私は息が詰^つって来るような気がした。と、その途端露路のあちらの端から夜警の杖^{つえ}の音が急に露路へ響いて来た。

私はいつもこの夜警が廻^{まわ}って来ると家のなかへはいつてしまうことにしていた。夜中おそく物干しへ出ている姿などを私は見られなくなかった。もっとも物干しの一方の方へ寄っていれば見られないで済むのであるが、雨戸が開いている、それを見て大きい声を立て

て注意をされたりするとなおのこと不名誉なので、彼がやって来ると勿々家のなかへは
いつてしまうのである。しかし今夜は私は猫がどうするか見届けたい気持でわざと物干し
へ身体を突き出していることにきめてしまった。夜警はだんだん近づいて来る。猫は相変
わらず抱き合つたまま少しも動こうとしない。この互いに絡み合っている二匹の白猫は私
をして肆な男女の痴態を幻想させる。それから涯しのない快樂を私は抽き出すことが出来
る。……

夜警はだんだん近づいて来た。この夜警は昼は葬儀屋をやっている、なんとも云えない
陰気な感じのする男である。私は彼が近づいて来るにつれて、彼がこの猫を見てどんな態
度に出るか、興味を起して来た。彼はやつともうあと二間ほどのところではじめてそれに
気がついたらしく、立ち留つた。眺めているらしい。彼がそうやって眺めているのを見て
いると、どうやら私の深夜の気持にも人と一緒にものを見物しているような感じが起つて
来た。ところが猫はどうしたのかちつとも動かない。まだ夜警に気がつかないのだろうか。
あるいはそうかも知れない。それとも多寡を括つてそのままにしているのだろうか。それ
はこういう動物の図々しいところでもある。彼らは人が危害を加える気遣いがないと落ち
着き払つて少しぐらい追つてもなかなか逃げ出さない。それでいて実に抜け目なく観察し

ていて、人にその氣配が兆^{きざ}すと見るやたちまち逃げ足に移る。

夜警は猫が動かないと見るとまた二足三足近づいた。するとおかしいことには二つの首がくるりと振り向いた。しかし彼らはまだ抱き合っている。私はむしろ夜警の方が面白くなって来た。すると夜警は彼の持っている杖をトンと猫の間近で突いて見せた。と、たちまち描は二条の放射線となつて露路の奥の方へ逃げてしまった。夜警はそれを見送ると、いつものようにつまらなそうに再び杖を鳴らしながら露路を立ち去ってしまった。物干しの上の私には気づかないで。

その二

私は一度河鹿^{かしか}をよく見てやろうと思つていた。

河鹿を見ようと思えばまず大胆に河鹿の鳴いている瀬のきわまで進んでゆくことが必要である。これはそろそろ近寄つて行つても河鹿の隠れてしまうのは同じだからなるべく神速に行なうのがいいのである。瀬のきわまで行つてしまえば今度は身をひそめてじつとしてしまう。「俺^{おれ}は石だぞ。俺は石だぞ。」と念じているような氣持で少しも動かないので

ある。ただ眼だけはらんとさせている。ぼんやりしていれば河鹿は溪^{たに}の石と見わけにくい色をしているから何も見えないことになってしまふのである。やつとしばらくすると水の中やら石の蔭から河鹿がそろそろと首を擡^{もた}げはじめ。気をつけて見ていると実にいろんなどところから——それが皆申し合わせたように同じぐらいずつ——恐る恐る顔を出すのである。すでに私は石である。彼らは等しく恐怖をやり過^{すご}した体で元のところへあがつて来る。今度は私の一望の下に、余儀ないところで中断されていた彼らの求愛が encore されるのである。

こんな風にして真近に河鹿を眺めていると、ときどき不思議な気持ちになることがある。芥川龍之介は人間が河童^{かわづ}の世界へ行く小説を書いたが、河鹿の世界というものは案外手近にあるものだ。私は一度私の眼の下にいた一匹の河鹿から忽^{こつぜん}然としてそんな世界へはいってしまった。その河鹿は瀬の石と石との間に出来た小さい流れの前へ立って、あの奇怪な顔つきでじつと水の流れるのを見ていたのであるが、その姿が南画の河童とも漁師ともつかぬ点景人物そっくりになって来た、と思う間に彼の前の小さい流れがサーツと広びろとした江に変じてしまった。その瞬間私もまたその天地の孤客たることを感じたのである。これはただこれだけの話に過ぎない。だが、こんな時こそ私は最も自然な状態で河鹿を

眺めていたと云い得るのかもしれない。それより前私は一度こんな経験をしていた。

私は溪へ行つて鳴く河鹿を一匹捕まえて来た。桶おけへ入れて観察しようと思つたのである。桶は浴場の桶だつた。溪の石を入れて水を湛たたえ、硝子ガラスで蓋ふたをして座敷のなかへ持つてはいつた。ところが河鹿はどうしても自然な状態になろうとしない。蠅はえを入れても蠅は水の上へ落ちてしまつたなり河鹿とは別の生活をしている。私は退屈して湯に出かけた。そして忘れた時分になつて座敷へ歸つて来ると、チャブンという音が桶のなかでした。なるほどと思つて早速桶の傍へ行つて見ると、やはり先ほどの通り隠れてしまつたきりで出て来ない。今度は散歩に出かける。歸つて来ると、またチャブンという音がする。あとはやはり同じことである。その晩は、傍へ置いたまま、私は私で読書をはじめた。忘れてしまつて身体を動かすとまた跳とび込んだ。最も自然な状態で本を読んでいるところを見られてしまつたのである。翌日、結局彼は「慌あわてて跳とび込む」ということを私に教えただけで、身体へ部屋中の埃ほこりをつけて、私が明けてやつた障子から溪の水音のする方へ跳んで行つてしまつた。——これ以後私は二度とこの方法を繰り返さなかつた。彼らを自然に眺めるにはやはり溪へ行かなくてはならなかつたのである。

それはある河鹿のよく鳴く日だつた。河鹿の鳴く声は街道までよく聞こえた。私は街道

から杉林のなかを通つていつもの瀬のそばへ下りて行つた。溪向うの木立のなかでは瑠璃るりが美しく囀さえずつていた。瑠璃は河鹿と同じくそのころの溪間をいかにも楽しいものに思わせる鳥だった。村人の話ではこの鳥は一つのホラ（山あいの木のたくさん繁しげつたところ）にはただ一羽しかない。そして他の瑠璃がそのホラへはいつて行くと喧嘩をして追い出してしまふと云う。私は瑠璃の鳴き声を聞くといつもその話を思い出しそれをもっともだと思つた。それはいかにも我と我が声の反響を楽しんでいる者の声だった。その声はよく透とおり、一日中變わつてゆく溪あいの日射ひざしのなかでよく響いた。そのころ毎日のように溪間を遊び恍ほうけていた私はよくこんなことを口ずさんだ。

—— ニシビラへ行けばニシビラの瑠璃、セコノタキへ来ればセコノタキの瑠璃。 ——

そして私の下りて来た瀬の近くにも同じような瑠璃が一羽いたのである。私ははたして河鹿の鳴きしきっているのを聞くとさつさと瀬のそばまで歩いて行つた。すると彼らの音楽ははたと止まつた。しかし私は既定の方針通りにじつと蹲うずくまつておればよいのである。しばらくして彼らはまた元通りに鳴き出した。この瀬にはことにたくさんさんの河鹿がいた。その声は瀬をどよまして響いていた。遠くの方から風の渡るように響いて来る。それは近くの瀬の波頭の間から高まつて来て、眼の下の一団で高潮に達する。その伝播でんぱは微妙で、

絶えず湧き起り絶えず揺れ動く一つのまぼろしを見るようである。科学の教えるところによると、この地球にはじめて声を持つ生物が産まれたのは石炭紀の「両棲類りようせい」だということである。だからこれがこの地球に響いた最初の生の合唱だと思ふといくらか壮烈な気がしないでもない。実際それは聞く者の心を震わせ、胸をわくわくさせ、ついには涙を催させるような種類の音楽である。

私の眼の下にはこのとき一匹の雄おすがいた。そして彼もやはりその合唱の波のなかに漂いながら、ある間まにおいては彼の喉のどを震わせていたのである。私は彼の相手がどこにいるのだろうかと捜して見た。流れを距へだてて一尺ばかり離れた石の蔭かげにおとなしく控えている一匹がいる。どうもそれらしい。しばらく見ているうちに私はそれが雄の鳴くたびに「ゲ・ゲ」と満足気な声で受け答えをするのを発見した。そのうちに雄の声はだんだん冴えて来た。ひたむきに鳴くのが私の胸へも応こたえるほどになって来た。しばらくすると彼はまた突然に合唱のリズムを素みだしはじめた。鳴く間がたんだん迫つて来たのである。もちろん雌は「ゲ・ゲ」とうなずいている。しかしこれは声の振わないせいか雄の熱情的なのに比べて少し呑気のんきに見える。しかし今に何事かなくてはならない。私はその時の来るのを待つていた。すると、案の定、雄はその烈はげしい鳴き方をひたと鳴きやめたと思ふ間に、するすると

石を下りて水を渡りはじめた。このときその可憐な風情ほど私を感動させたものはなかった。彼が水の上を雌に求め寄つてゆく、それは人間の子供が母親を見つけて甘え泣きに泣きながら駆け寄つて行くときと少しも変つたことはない。「ギョ・ギョ・ギョ・ギョ」と鳴きながら泳いで行くのである。こんな一心にも可憐な求愛があるものだろうか。それには私はすっかりあてられてしまったのである。

もちろん彼は幸福に雌の足下へ到り着いた。それから彼らは交尾した。爽やかな清流のなかで。——しかし少なくとも彼らの痴情の美しさは水を渡るときの可憐さに如かなかった。世にも美しいものを見た気持で、しばらく私は瀬を揺がす河鹿の声のなかに没していた。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集別巻1 現代名作集」 河出書房

1969（昭和44）年5月30日初版発行

入力：・kaku

校正：浜野 智

1998年8月28日公開

2003年9月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

交尾

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>